

至るまで、本門の妙戒、能く持たんや否や」と問い、受者が「能く持ち奉る。南無妙法蓮華經」と答へ、次で「本門の本尊」本門の題目の受持を問ひ、答える形式で行われている。これは法華經宝塔品の「是名持戒(略)無上仏道」(開結三四一頁)の経説に基づき、題目の受持がすなわち持戒であるとする教えによるものである。→かい(戒)、かいだん(戒壇)、じかい(持戒)(小松邦彰)

じゆかい 【授戒】 仏の定めた戒法を弟子や信者に授けること。またその戒を守ることを誓わせること。『下山御消息』(一三二七頁C)にみえる。
じゆかく 【種覚】 あらゆる種類の事柄を覚る智慧。種智に同じ。また種智を得た仏のこと。『三界八苦を離れ種覚を成就する故に安穩得と言ふなり』(法華法華義記)巻四・正蔵三三三卷一六頁a)など。『御講聞書』に「十方種覚共に稱譽する所なり」(二五五九頁B)とみえるのは、『法華文句』巻五上・正蔵三四卷六六頁b)からの引用文。
しゆがく 【修学】 「しゅうがく」とも。仏道を学び修行すること。解脱を求め仏法を学び修めること。『諸宗問答抄』(一七頁)に「教法をも修学せず、」(七頁)とみえる他、『法門可被申様之事』(四五二頁A)に引く最澄の『山家学生式』(伝全)「巻二(二頁)の文に「叡山に住せしめて二十二年山門を出さず而業を修学せしめん」とある。

しゆがくげきょう 【修学解行】 仏法を学び、教理を理解し、修行すること。『得受職人功徳法門抄』(六二二頁)に法華經の受職灌頂の人について、「今経の受職灌頂の人に於て二人あり。一には道二には俗なり」と僧・俗の二種を分かち、「比丘の信行は俗の修学に勝る(略)俗の修学解行は信行の比丘の始信に同ず」とみえる。すなわち在家の学問と修行に勝れた者でも、始めて信心に任じたばかりの僧と等しいとし、ゆえに在家の受職は許されないとす。

しゆがくげりょう 【修学解了】 仏法を学び修行し、正しく理解して会得すること。法華信仰の上さらに学問的知識と化他の修行とを兼ね備えた人をいう。『得受職人功徳法門抄』に法華經の受職灌頂の人について、「今経の受職灌頂の人に於て二人あり。一には道二には俗なり。道に於て復二あり。一には正しなり(六二二頁)と、修学解了の僧とただ信心だけの僧との二種に分けていす。さらに「修学解了受職の比丘は位位に同じ。是れ即ち如来の使者なればなり」(六二二頁)と、学問解了の僧は仏の使者であると述べている。
しゆかん 【修観】 観法の修行のこと。観心修行のこと。『摩訶止観』巻八上(正蔵四六卷七頁a)等にみえる。『立正観抄』では「慈覺大師の釈に云く、三観とは法を得せしめんが為の修観なり云云(八四七頁)として円仁の釈と称する書を引用しているが、『録内拾遺』巻八

では「檀那流一心三観の記に云く、慈覺の三観は行者の心を持たしめんが為なり。伝教の三観は法を得せしめんが為なり。修観と法体は互いに違ふべからず。此の書、現本に有無未だ詳かならず。台家の秘本・切紙の中に之を載す。今所引の文言と全同なり。但し転用か」(日全)四二五頁)とて『檀那流一心三観之記』なる書の転用であると説明している。
じゆき 【受記】 衆生が仏から未来に成仏するという予言(記)を受けること。梵語vyākaraṇaの訳。記・記別とも訳す。授記に同じ。授記は本来「分離・展開」のことで、經典を内容によって区分する十二部經の第三。のちに仏弟子たちが将来の成仏に関する保証をすること、または成仏の保証を得ることを意味した。法華經に於ける声聞・提婆達多・竜女の授記などが特に有名である。授記の説かれる様相により形式的に細分化される。『転重經受法門』(五〇八頁A)にみえる。→じゆき(授記)

じゆき 【授記】 授記・授決・記・記説・記別等に同じ。原語は梵語vyākaraṇa、あるいは梵語の動詞vyā-j-の種々の変化語に求められる。原始經典ではいろいろの意味で使用され、大乘經典にいたって「授記作仏」すなわち「未来成仏の予言」の意味に限定されて用いられた。菩薩に対する授記が一般的であるが、特に法華經は舍利弗等の声聞授記、提婆達多・竜女の授記等の授記作仏を説くことで有名である。

授記思想の成立過程は以下の通りである。まず、パーリの原始經典において、vyākaraṇaの用例として、(1)文法、(2)九分教の一、(3)予言記説、(4)説明解、(5)返答の五種が挙げられる。この中、「予言記説」には、パーリ四部において(1)神力による外道に対する死の予言、(2)出家在家の死者の再生および証果についての記説、(3)生存者に対する証果についての記説、の三種の形態が存在する。また記説を与える形式としては、(1)釈尊による「人格的記説」と(2)出家在家の修行者自身の「法による記説」の二種が説かれていた。これに対して漢訳四阿含には、(1)釈尊による死後の再生についての記説、(2)生者に対する釈尊による証果の記説、(3)自己による記説、の三種の形態が存在する。このように原始經典南北両伝の間に相違点が認められるが、これら原始經典にみられる予言・記説としてのvyākaraṇaの用例は、仏教特有の表現であり、これをもって授記思想の萌芽とすることが出来る。また、『増一阿含經』(正蔵二卷七五七頁c)に付加された宝蔵如来の授記と燈光如来の授記に関する説話は、授記作仏すなわち未来成仏の記別を与える最初の文獻例である。これは自利行の業報としての作仏であった、その意味で業報授記であるが、ともかくも授記作仏の源流をここに見出しうるのである。次に南伝の本生經類では、『アパダーナ』において「人格的記説」と「法による記説」が一般化し、特に燃燈仏授記以後の授記作仏思想の普遍化に伴

い、「法による記説」と同系統の業報記説が述べられており、『ジャータカ』の因縁物語には成仏確定者である菩薩への授記がみられる。これに対し、北伝の本生經類、特に『大事』(仏本生集經)では燃燈仏に始まる授記作仏思想が、成仏確定者としての菩薩への「諸仏授記」となり、さらに「諸仏次第授記」へと展開していった。また「諸仏授記」においても上座部系の「業報授記」から、大衆部系の「誓願授記」への展開がみられる。この誓願には上求菩提のみの自利行から、下化衆生の利他行を内包する菩薩の誓願への発展が認められる。そして、大衆部系にみられる菩薩思想とその実践階梯としての十地の形成に密接な関連を見出しうるのである。さて、燃燈仏をはじめとする過去仏や未来成仏の確定せる弥勒菩薩のように、時間的に過去・未来の諸仏を創出したことは、やがて空間的に現在世の諸仏を存在させることとなる。それはその志願者である多数の菩薩の存在を前提とすることとなり、種々な形態の菩薩の出現を可能とした。初期大乘經典には種々の菩薩に対する成仏の授記が、複雑な形式・内容をもって説かれている。これらは仏陀の志願者である菩薩が、自利行・利他行の菩薩行を因行として、成仏の記を与える誓願授記であって、大乘の教法すなわち一乗が声聞・縁覺一乗のそれよりも勝れていることを称揚する論拠はそこにあつたと言えよう。しかし、仏陀の慈悲の拡大に伴い、声聞・縁覺の「一乗作仏」の説示を必要とした。ここに法

華經形成のモデルがあつたのであり、その理論的根拠は開三願の一乗思想によって表明されるにいたつたのである。そして釈尊によって仏弟子である声聞に成仏の記を与えることとなり、さらに提婆達多にみられるように、正法誹謗の極悪人たる提婆達多や成仏の道器でない女人に対する授記作仏が説かれることにより、成仏の可能性は無限に拡大していったのである。この無限の成仏の可能性は法華經以後の中期大乘經典にも継承され、『涅槃經』において菩提心を持たない一闍提の成仏を認めるにいたつて完結することとなった。しかし、『涅槃經』の仏性論や『勝鬘經』の如来蔵思想によって成仏の理論的基礎が与えられるに及んで、仏による未来成仏の授記はその形式的表現の必然性を失ふこととなり、授記作仏の形式は中期大乘經典以降次第に消滅するにいたつたのである。すなわち、授記思想とは、法華經成立当時においては二乗作仏の理論的基礎となるべきものがいまだ存在していなかつたので、それに代るべきものとして、仏の立場からの救済すなわち人格的授記によって、それを表そうとして成立したのである。要するに授記思想は初期大乘思想の形成に関して、重要な条件と転機を与えたものであり、中期大乘經典の仏性・如来蔵思想の形成にいたる過渡期の役割を果たしたと言えるのである。

じゆき 【授記】 授記は梵語vyākaraṇaの訳。成仏の保証(記・記別)を受け、仏となること。梵語vyākaraṇaは原始經典では種々の意味に使用されたが、大乘經典にいたつて「授記作仏」(未来成仏の予言)の意味に限定的に使用されるようになり、菩薩への授記

が説かれた。そして、初期の大乘經典が大乗菩薩道の強調のために二乗を不成仏とし、大乘菩薩のみの授記作仏を説くことに對して、開三願一、すなわち一乗思想を表明した經典とされる法華經は、一乗思想の宗教的具體的表現として授記を説き、それ以前には不成仏とされた声聞・縁覺の二乗への授記作仏を説いたのである。このことは法華經の特色の一つとなつており、竜樹は『大智度論』(正蔵二五卷七五四頁b)においてこの点を取り上げ、阿羅漢の「受決作仏」を説く法華經が、「般若經」より勝れているとしている。なお、『爾前得道無御書』(一五一頁)等には「諸の菩薩の授記作仏」とあり、『秀句十勝抄』(三三六頁A)にも「諸の菩薩の授記作仏」とあるのは、いずれも法華經譬喩品冒頭の舍利弗の「我昔仏に從ひてまつりて是の如き法を聞き、諸の菩薩の授記作仏を見しかども」(開結一二五頁)の語によるものである。なお、菩薩への授記としては『阿闍世國經』(正蔵一一卷七五三頁b)の大日如来の阿闍世菩薩への授記、『思益梵天所問經』(同一五卷四五頁a)の網明菩薩の授記、そして法華經序品の日月燈明仏の徳蔵菩薩への授記(同九卷四頁b)、譬喩品の華光如来(舍利弗)の堅滿菩薩への授記(同一頁c)等々が知られる。
しゆきやくりようらい 【手脚續展】 續とは、まとう、まつわるの意。戻とは、まがるの意。手脚續展とは、腕や脚がまがり自由に伸びない状態をいう。法華經勸